

追想吉田健介君*

吉川 敦

かれとは小学校で一緒になった。確か昭和 24 年の春、わたくしは当時横須賀にあつた清泉女学院小学校に入学した。かれもそこにゐた。校地はアメリカ海軍基地に隣接してゐて、もともと帝国海軍の横須賀鎮守府の一部を成してゐたものであつた。敗戦後の米軍占領統治下のある時代の挿話に違ひないことであつたらうが、そこに学校が出来るとするには、かれのお祖母さまを含むカトリックの人たちの工作があつたと後で聞いたことがある。二年間通つた後、同じ学年の二十人足らずの生徒は、横須賀に通ふのを止めて、この小学校の鎌倉にできた分校で過ごした。この時期のことを聞ける当時の大人はお元気で九十歳は越えてをられるはずだが、かれの母上は先年亡くなられ、わたくしの母も病床にあつて経緯もよくわからない。何人かのお母様が交代で鎌倉と横須賀を往復する形で子供たちの送り迎へをしてゐたが、かれの母上は言はばリーダー的存在であつたやうに記憶してゐる。今思ふと、朝鮮戦争が始まつて、横須賀では防空訓練があつたり、池子の弾薬庫の爆発などもあつて、物騒な時代ではあつた。もつとも鎌倉や逗子から横須賀に通ふのを止めたのはわたくしたちだけだつたから別の理由があつたはずではある。

当初の鎌倉の分校は、さる富裕なカトリック信者のご協力があつたと聞いたが、青砥藤綱の故事で知られる長勝寺橋の奥の、北条高時の一族郎党が切腹したといふ腹切りやぐらのごく近くにあつた。山の中の一軒家のやうなところが教室で、後は何もなかつたけれど、わたくしたちは「お山の学校」と言つてゐた。鬱蒼とした杉木立で囲まれてゐたが、それはそれで四季折々楽しい場所であつた。藪をかき分け山の尾根まで登れば相模湾が見えた。春先、山すその流れにはカヘルやキモリの卵があり、オタマジャクシがゐたが、それは別にそこに限つたことではなかつた。藪には蛇もゐた。くつきりと覚えてゐるのは、藪の薄暗がりの中に、蘭科だと思ふが、大振りの紫がかつた袋状の花がいくつか咲いてゐたことである。当時の鎌倉は至るところかういふ感じであつたとは言へ、かれが生き活きとしてゐたことは容易に想像が付く。

次の年は、鎌倉の分校は何学年か増へて大きくなり、かつて鎌倉幕府があつた場所に移つたはずだが、そこでのことはよく覚えてはゐない。清泉小学校の現在地であるが、そのときは、まだ、大きなお屋敷といふ感じで、校庭も日本庭園といふべきものに近かつたやうに思ふ。自転車で走り回つてゐた

*健ちゃんはどう思ふかは不明ながら後述（付記）の理由で歴史的仮名遣で記します。

ときに、梅の枝をうまく交せず左眉の上を切った記憶がある。鶴岡八幡宮から鎌倉宮に向ふ道筋にあるところだが、今は、ここも間違ひやうのない校舎や校庭になつてしまつて面白くもかしくもなくなつた。周辺も、かつて田圃があつたり畦道が巡らされてみたところが、タイル張りの道路沿ひに低層の洋館が立ち並び、すっかり変はつてしまつた。当時かれの一家がお住まひだつたのは学校のすぐ近くの山の中腹であつたが、それらしいところがどこだつたのかもわからなくなつてゐる。

かれの家には随分遊びに行つた。わたくしは海岸のそば、かれのところは西御門だつたから近かつたわけではない。行くのが楽しかつたのである。「冒険王」といふ月刊雑誌がいつもあつて、連載の「砂漠の魔王」といふ、細密に描かれた不思議な、当世風に言へば、メカ群と、さうして超自然的な魔王が出てくる多色刷りの絵物語といふか劇画を読むことができるのも楽しみだつた。他にも、「少年王者」とか「大平原児」とか連載の絵物語があつたが、雑誌は違つたかも知れない。とにかく珍しいものがたくさんあつた。断片的だが、覚えてゐるのは、生きたカブトガニである。今考へると出所は疑ひやうがないものの輸送は大変であつたらう。もう一つ記憶に残つてゐるのは何とも肌理の細かい真白な生地 of イギリスパンである。神戸から届いたと母上が仰つてゐたと思ふが、弾力と言ひ、ほどよい腰の強さと言ひ、あれだけのパンの味ひには以後出会つたことがない。昭和二十年代の半ばくらゐのことであつた。この頃、サンフランシスコの講和条約の調印式の模様がラジオ中継されたことがあり、かれと暁子さんが古風なラジオに耳を傾けてゐる写真が新聞に載つたことがある。記事中にラジオはこのために借りたものであるといふやうな説明があつて、それを読んだ級友たちに気の毒がられたといふ話があつた。

確か、かれと一緒に中村琢二画伯のところへ絵を習ひに通つた。断片的な記憶であつて、もちろんと言ふのもかしいが、かれの方がうまかつたやうに思ふ。石膏デッサン、パステル彩色や板に油絵くらゐは覚えゐるが、キャンヴァス油彩までは行かないうちに、かれは東京に引越し、わたくしも通ふのを止めたと思ふ。名越の中村先生のアトリエの辺りも先日犬を連れて歩いてみたが、もう思ひ出せなかつた。当時、先生のアトリエにあつたと思はれる絵が今は福岡市立美術館に展示されてゐるやうに思ふ。

かれが牛込弘方町に移つてからさう時間が経たない内に一回遊びに行つたことがある。暁星の同級生が遊びに来てゐた。かれの部屋の棚には割り箸を短く切つて厚紙で前後の翼と垂直尾翼を付けて全体を銀色に塗つた手作りの小さな飛行機が多数置いてあつた。いはゆる零戦のつもりであつたらうか。三人でこれらの飛行機を手を持つて遊んだ記憶がある。そのとき弘方町のお宅は庭の芝生が鮮やかな明るい建物であつた。先年母上のお通夜の折に鬱蒼とした感じに変はつてゐたのにはつくづく年月を感じた。この度のかれの通夜では庭の巨木の枝の一部が朽ち落ちてゐて、また、年月が経つたのを覚える。

大学に入ってから飯高茂さんの方が詳しい。かれ、つまり、健ちやんがまだローマに移る前だったが、一時帰国したときに飯高さんに誘はれて、払方町のかれのうちにお邪魔したことがある。父上が亡くなられて余り時間が経つてゐない頃であつたと思ふ。夜でもあつたので、庭の様子は覚えてゐない。飯高さんは先に帰り、その後、母上とかれに暁子さんも加はり、多少昔話をしたことが記憶にある。そのときのかれの話から、かれが現代日本を含む俗事に並々ならぬ関心を持つてゐることがわかつた。

この夏、飯高さんからの連絡で慈恵に入院中のかれを見舞つたとき、かれは楽しいからと言つて、暁子さんに頼んでベッドの位置を改めて、身を起こした上で、どういふつもりで口にしたのかは今となつてはわからないが、イタリアでは定年の後は完全に仕事を辞めて暮らして行けるのだと強調した。日本、イギリス、そしてイタリアの、それも近代の科学文明だけではなく、その掘つて来る何百年分かの文化史までを、言はば、身を以つて感じるができるといふ稀有な位置にゐた人であつただけに、さういふ話、文字通りの文明批評の話聞かせてほしかつた。かれしか持ち得ないはずの視点があつたに違ひなかつた。

付記。かれの父上、吉田健一氏は、中村光夫氏や福田恒存氏、さらに亡父吉川逸治と「鉢の木会」といふ文芸放談の会合を月当番の回り持ちで開いてゐた。わたくしの歴史的仮名遣は、「鉢の木会」編集の『聲』といふ季刊誌連載の福田氏の「私の国語教室」で身に付けたものである。「鉢の木会」には、他に、神西清氏がをられたが早く亡くなつてしまひ、また、大岡昇平氏や三島由紀夫氏もをられた時期がある。鎌倉にゐたのは、神西、中村、吉田、吉川で、当時はそれぞれの自宅で飲み会をしてゐたが、皆子供が小さかつた関係で、家族ぐるみでの宴会準備であつたのか、鎌倉の市内のときは子連れで夫人たちが会場のお宅に集まつて手伝ひをしてゐたやうに覚えてゐる。「鉢の木会」は、結局は、中村、吉田、福田の各氏と亡父でしばらく続いた。最後は福田氏と亡父だけになつた。亡父が世を去つて覚えてゐる人はゐなくなつた。ここで、歴史的仮名遣を敢へて用ゐたのは、さういふ不思議な時代への私的な追憶といふこともある。